片山地区を巡る大館歴まち散歩

1.日 時 平成30年11月17日(土) 9:00~12:00

2. 主 催 大館市まちづくり課

3. 講師清野宏隆(大館市文化財保護協会事務局長)

4. 集 合 片山町内会館 9:00

5. ねらい 歴まち散歩をとおして当時の人々の生活や文化を知る。

散歩コース

片山町内会館(座学 片山地区の歴史)——会館出発・国道 7 号線(江戸時代の羽州 0:00 - 10:00

 $9:00\sim10:00$ 10:05

街道・一里塚跡) ――冷水坂――お日様――片山八坂神社――片山村1丁目(本村)

10:20 10:35 11:00

お茶の水――片山町内会館――片山三丁目児童公園(菅原神社、片山館コ遺跡)――

11:10 11:20 11:30

二つ山遠望――バスに乗車・解散(12:00)

1 「片山八坂神社資料」の発見

平成21年12月下旬に大館市片山町1丁目の片山八坂神社の神輿の下にあった、漆塗の木箱の中から**江戸・明治・大正・昭和**にまたがる資料が見つかった。この年行われた大々的な社殿の改修工事が発見のきっかけとなった。片山町内会(会長谷地田恒夫氏)の要請を受けて、資料の整理にあたり、「片山八坂神社資料」目録としてまとめた。

資料の内容 修験の養善院関係28点(うち江戸時代26点)

二ツ山富士信仰関係 35 点(うち江戸時代 18 点)

歴史一般37点(うち江戸時代7点)――検地帳、片山村絵図など

片山八坂神社関係101点(うち江戸時代1点)

合計 201 点 (うち江戸時代 52 点)

2 片山の歴史—大要

「片山八坂神社資料」は江戸時代(藩政期)から昭和の終戦直前までの資料であり、一つの地区の歴史を長年にわたって連続的にとらえることができるとともに、大館地方を越えた中央の歴史を考察する上でも意味がある。

(1) 江戸時代の片山村―農業生産

慶長6年(1601)秋田実季が家臣片山彦四郎(元浅利氏家臣)に片山村の54石6斗を与えた。

正保4年(1647) 片山村は252石の村。片山村は親郷大館町の寄郷。

享保15年(1730) 片山村の戸数は27。

寛政5年(1793)には片山村は戸数51、人数171、馬数49であった。

宝永元年 (1704)「片山村打直検地野帳」(検地帳)では田畑屋敷 45 町余、生産高 395 石余。

周辺の村々とともに新田開発が進み、生産力が大きく向上。その後も、享保年間まで生産力が上昇。片山の田地は長木川の南にあり、長木川から用水を確保するために、村人は共同して堰を開いた。寛政4年の「**片山村絵図」**に書かれている**深堀関(ふかっぽりせき)、下関(したせき)**と**二ツ山の北側を通る水路**は現在でも使用されている。

寛政4年(1792)「片山村打直検地野帳」では田畑屋敷32町余、生産高273石余に減少。

「片山村絵図」に長木川の氾濫により田地が荒地化した状況が見える。

その後片山村の石高は回復に向かったが、宝永・享保期ほどの回復には至らなかった。

明治22年(1889) 片山・餅田・立花・川口村からなる下川沿村が誕生。

同 29年 (1896) 長木川の洪水が片山の田地に甚大な被害。

(2) 片山八坂神社(牛頭天王社〈堂〉)

所在地 大館市片山1丁目55。もとは**牛頭天王堂(社)(ごずてんのうどう)**と称し、明治になって八坂神社と改称した。**祭神は素戔嗚尊(すさのおのみこと)**。社地はもと、古片山にあったが、片山地内山子屋敷、ついで現社地に移り幾度か改築した。

八坂神社は**牛頭天王**をまつる京都祇園社(ぎおんしゃ 八坂神社)を分祀したものである。牛頭 天王はインドの祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)の守護神とも、薬師如来の仮の姿ともいわれる。 また、素戔鳴尊になったともいわれる。**疫病(えきびょう はやりやまい)を除く神**としてま つられた。**別当は修験の養善院。**

正徳5年(1715)の片山村には牛頭天王社など6社があった(「片山村牛頭天王社など堂・社地書 付写」)。村は農事だけでなく、祭事を通して共同体を形成。

明治元年(1868)明治政府が神仏分離令を布告し、牛頭天王社は八坂神社と改称。

同 5年には修験道禁止令を布告。養善院は神官に転じた。

大正3年(1914)氏子たちは片山地内の土地を鉄道敷地に売却し、これを元手に境内の北側隣接地 611坪を取得し社地を拡張。

昭和11年(1936)に修築を兼ねて社地中央の現在地に移転。

同 「村社八坂神社縁起」

霊木の多母木(たものき)が発芽したら作付、**胡瓜**は忌物(いみもの)、**力士掛放二度右衛門の怪力**など興味ある事柄が伝えられている。事実、胡瓜は氏子たちが近年まで栽培しなかった。

平成21年八坂神社の改修と屋根の全面葺き替え。

(3) 富士信仰

幕末に、二ツ山を拠点に富士信仰。

江戸で活動していた大館生まれの修験泰行平山(たいぎょうへいざん)が修験養善院の協力を得て富士講をつくった。片山町内会館に「富士御山絵図」がある。「片山村二箇山碑」の石碑が二ツ山の入り口にある。

(4) 下川沿壮丁報告式式辞・祝辞

国家主義・軍国主義の動き。戦時色濃厚。徴兵検査は壮丁報告式の翌日に。神社を利用。

3 片山村絵図について

(1) 絵図の作成にどんな人があたったか。資料としてどんな価値があるか。

「**片山村絵図**」(写真・図) は裏書に「寛政四年子ノ六月 立原兵左衛門、上神谷藤左衛門,進藤 六左衛門、瀧沢熊吉」とあるように、彼らが寛政4年6月に作成にあたった。片山村は寛政4年に 打直検地をしているので、それに備えて秋田藩が作成したものである。行政、土地利用、水利、交通、信仰などの状況を知る上で貴重な絵図である。

(2) 長木川と田地の状況をとおして当時の農民の生活を見ることができるか。

寛政4年の打直検地の田畑面積と米の生産高の大幅減少はこの絵図に反映している。長木川は城 下絵図では城下町の北に描かれているが、城下の西の方になると一本の川としてあっさりと描かれ ているだけである。

しかし、この絵図では分流がいくつも描かれている。洪水によって流路が変わることはたびたび。古川の名はかつての川の流れを示している。柳の木が長木川の土手だけでなく、低地である後背地に多く見られる。柳生は柳の木が生えている地で、洪水のさい土砂が堤防を越えて田地に流れ込んで荒地となり、そこに柳が生えたものと考えられる。このような状態では上田が減少し、下々田が増加するのもやむを得ないことである。

(3) 用水路の整備には農民たちががんばった。

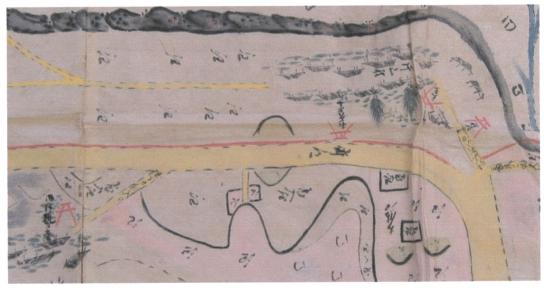
片山村は堰(せき 用水路)の開削によって、長木川から田地の用水を確保していた。絵図の深 堀関の取水地は長木川の白鳥広場にあり、ふかっぽりせきと呼んでいる。ここは片山村の地でなく 大館城下の独鈷町の北より。現在この水路は市街地を流れている。下関(したせき)も現在その名を残している。また、長木川沿いに二ツ山の北側を通って餅田村に流れる水路は現在も使用されている。

(4) 羽州街道はどこを通っていたか。

羽州街道は片山野、根下戸野の間を通っていた。この地は多くが草地や林地で、街道沿いに松並木があった。この道筋は現在の国道7号線である。羽州街道は片山の東端からは7号線を離れて御坂方面に右折し、神明社前に伸び、城下の北の出入り口足軽町(現常盤木町)に入る。そして大町、田町、川原町、独鈷町を通過し、北の出入り口通町に続く。ここから長木川を越えると有浦地区。絵図ではその地点に津軽街道と記している。

街道には、片山村の一里塚が の形で記されています。この場所は現在の片山1丁目。塚木は杉といわれているが、その場所はこれまで諸説あり確認できなかった。

また、片山村入口と根下戸村入口の道は今でも生活道路として利用されている重要な道である。 集落は道路を挟んで成立するのが一般的だが、片山村と根下戸村は、明治以後も それ ぞれ下 川沿村と上川沿村に属し、学区が異なっていた。これは片山村が北の長木川水系の田地、根下戸村が南の米代川水系の田地を生活のよりどころにしていたからである。お互い背中合わせの生活をしていたことになる。



寛政4年(1792)「片山村絵図」の片山1丁目付近

(5) 町と村の境界がわかるか。

隣接の大館町、根下戸村、餅田村、沼館村、松木村などとの境界が色別されている。 長木川の 北の有浦地区が大館町に含まれていたことが確認できる。

(6) 今日の神社は江戸時代にあったのか。

片山村に牛頭天王堂、神明堂、天神堂、相染堂(天神堂末社)、立杭村に伊勢堂、薬師堂などの堂 社があった。牛頭天王堂は「養善院世代書上帳」によれば浅利氏が建てたという。佐竹氏が入って からは**修験の養善院(斉藤氏)が明治に至るまで社務を継承**した。牛頭天王堂は正徳5年(1715) には堂の規模が3間4面で、鳥居の高さは8尺5寸であった。

また、絵図には、根下戸村の伊勢堂、餅田村の伊勢堂、相善堂、沼館村山神堂、松木村の八幡堂が記されている。共同体としての村は農事だけでなく、祭事を通して維持されていたことがわかる。

正徳5年(1715)の「片山村牛頭天王社等堂・社地書付写」(部分)



◎散歩(徒歩)に当たっての注意

- 1. 交通事故に遭わないよう前後左右に注意して歩きましょう。信号に注意しましょう。 説明はできるだけ安全なところでします。説明者のそばに集まってください。
- 2. トイレは途中にありません。

4 片山八坂神社で

牛頭天王社の別当であった養善院は愛宕堂近くの長倉に居をかまえ、当山派の京都醍醐寺三宝院(真言系)に属し、伊勢の世義寺(せぎでら)の先達(せんだつ)の支配を受けた。吉野から熊野に至る大峯山で修行し、補任状(ぶにんじょう 任命状)により官位を得た。八坂神社には補任状が20枚ほど所蔵されている。 補任状 養善院 天保3年

代々の別当は、大館愛宕社をはじめ片山・川口・雪沢村の 23 社を取りしきっていた。

忌物 (いみもの) はきゅうりである。その理由は、素戔嗚尊が荒神であったため、島流しにされ、その途中海が荒れて難破しそうになったとき、助けてくれた船がきゅうりを積んでいたからという。氏子はきゅうりを奉納し、きゅうりを食べないといわれた。

境内の**たもの木**は発芽したら作付し、落葉後 20 日で降雪 があるという霊木で、大祭には神符として樹皮をもぎ取って 帰る者が多かった。

怪力伝説もある。力士掛放二度右衛門(かけはなちにど えもん)は将軍家光公の前で将軍家の力士を「鷹の喰い落 とし」という奇襲で破ったという。

また、弥右衛門の娘は大館築城の際に大きな材木を背負って城まで運んだので、人々は驚き神霊によるものといったという。

かつて祭りの**奉納相撲**が盛んで、鉄道の乗車割引が行われたときもあった。このような伝説は相撲が盛んだったことにより生まれたと考えられる。嘉永7年(1854)に大館町平泉喜六の寄進した**石灯篭**が参道に現存している。





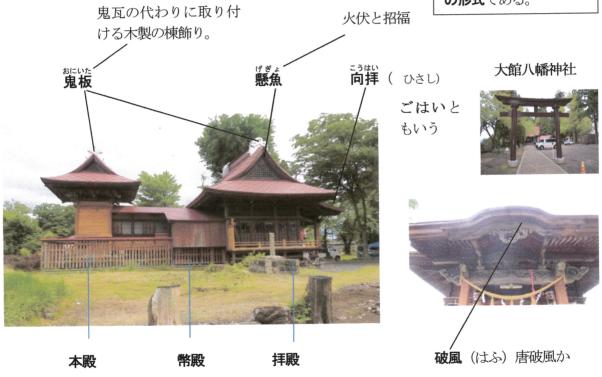
鳥居 京都市八坂神社の鳥居の形式



転び 2 本の柱の傾斜 のこと。又その度合。

鳥居の特色は柱が八字 形に上部で内側に傾斜 し転びの様式をとり、柱 脚には礎盤がある。笠 木・島木は両端で反りを みせ、反増となってい る。笠木・島木の先端 (鼻)は斜めに切られて いる。

京都市八坂神社の鳥居の形式である。





石燈籠神社の合祀



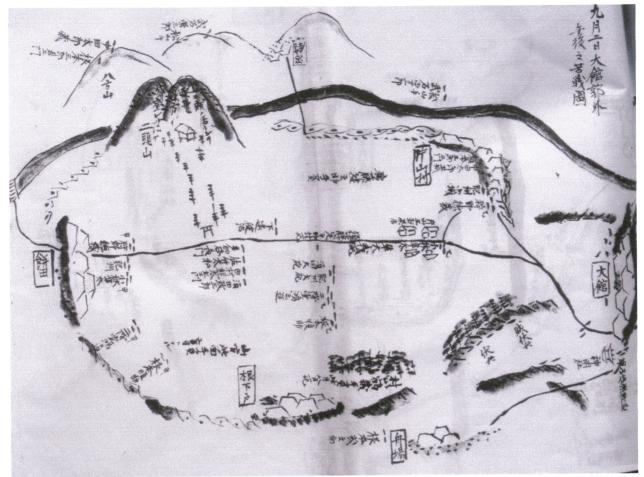


祭典の神輿

素戔嗚尊 (すさのおのみこと)

5 戊辰戦争と片山村

慶応4年(明治元年)「大館城代佐竹大和君戦略図」狩野徳蔵 <狩野良徳氏蔵>



これは、9月2日大館郊外苦戦之図と記された場面である。1868年8月22日大館城が落城し、城を 脱出した佐竹大和ら大館軍は後退し荷上場に本陣を置いた。同28日に**佐賀隊・小城隊**が荷上場に到着。 戦力を増強した政府軍は9月2日**岩瀬会戦**で勝利し、午後には餅田村を突破し、南部軍と二ツ山と片山 村で激しい戦いを展開した。

戦争略図は2日の戦況を記したもので、根下戸野と片山野における政府軍と南部軍の戦闘を描いている。狩野徳蔵隊が片山村に入ると、根本順助・小林隼太隊がこれに続き、大館を占拠している南部軍に砲撃を加えた。この時、南部軍が左側より現れて小林隼太隊を攻撃。隼太は流れ弾に当たり討ち死に。中田太郎蔵・根本三郎右衛門隊は二ツ山の南部軍を破り鳶山(土飛山)に進撃。根本幾之助隊は餅田村から舟場付近まで進んだが、徒歩坂(勝坂)の南部軍の砲撃を受けて苦戦した。同3日は大雨で休戦。同4日餅田・片山で激しい戦闘があり、南部軍は午後敗色濃くなり大館を放棄。同6日佐竹大和は大館城を奪還し入城した。政府軍の進軍路は羽州街道であることが絵図に見える。

左から

冷水坂 お日様(神明社) 御茶ノ水



片山館コ遺跡

天神緑町から **菅原神社(天神)** (片山3丁目公園)











